



カタクリの花 (3月下旬・由利本荘市西目町根子ノ沢)

◆春の柔らかな日差しの中、恥ずかしげにうつむいて咲く姿が印象的な早春の花。
7~8年ほど地中で力を蓄え、地上にその可憐な姿を見せるのはほんの僅かな間だけである。

宗務所檀信徒講習会の様子



(平成29年4月)



(令和3年5月)

秋田県宗務所では、感染対策を徹底した上で、梅花講習会等の所内行事を徐々に再開しております。写真の通り、コロナを境に講習風景もすっかり様変わりしてしまいました。我慢の日々はもう少し続きそうですが、早期収束を願い、今できることを精一杯がんばって参りましょう！

昨年末に、県内梅花講実態調査と称し、現時点での県内梅花講数及び講員数を把握するべく、県内全講へ実態調査を依頼しました(※九教区「能代市・山本郡」は、約二年前に当時の教区長より依頼を受け調査済みの為、除外)。それにより、死亡・老齢等による多数の除籍申請が届き、それに伴い閉講を決めた講もあり、令和元年末の時点で、「一四四講・四五〇九名」登録されていた講員が、今年の三月十日時点で、講数が「二三九講(五講減)、講員が「三五七四名(九三五名減)」という驚くべき調査結果が出ました。

しかし、この結果に憂うことなく、各々が信念を持って梅花流の研鑽に努めることにより、秋田県内全域にもっともっと「梅花」が咲き誇ってくれますことを念じております。



令和3年6月1日
第48号

発行 梅花流師範・詠範の会
会長 本間 雅憲
題字 初代会長・故 加藤信三師
編集者(広報部) 近藤 俊彦
印刷所(資) 由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局
倫勝寺(能代市) 山田 卓爾
TEL 0185-58-2302



秋田県内梅花講の現状について

曹洞宗秋田県宗務所
梅花主事

中 村 卓 道

『同行』第四十七号では、鹿角市花輪・恩徳寺二十三世天桂祖芳大和尚様ご遷化の報として、奥山芳寿老師からのご寄稿を掲載致しました。今回は、鹿角曹洞宗寺院護持会報『こころ』より転載という形で、令和二年十月二十五日に厳修された本葬儀の様子を菅原芳徳師範からご寄稿いただきました。

また、梅花を通じてご縁のあったお二人の梅花講員さんからも、祖芳老師を偲んでご寄稿いただいております。



恩徳寺東堂・岩館祖芳老師本葬報告

鹿角市・圓通寺住職

菅原芳徳

去る七月十八日、恩徳寺・岩館祖芳東堂老師がご遷化(逝去)なされました。昨年の令和元年九月に晋山退董式が行われてまだ一年も経たない夏の暑さの中、慈悲にあふれた「ぎつすい」の和尚様が旅立たれました。

百力日にあたる十月二十四日・二十五日の両日、本葬儀が恩徳寺にて厳修なされました。

現況のコロナ禍において随喜(参加)される和尚様方の人数に制限はございましたが、沢山の檀信徒様、また有縁の方々がご参列なされました。

老師が生涯をかけて仏様の教えを広めて来られた梅花流詠讃歌のしらべのもと、涙で滲んだ式場全体で老師の生前の



本葬〜乗炬仏事(乗炬師・吉田順一老師)

面影を偲んだ二日間でありました。

祖芳老師がふるさと鹿角に残された功績は、目に見える形での寺院関連の建造物はもちろんのこと、何よりも『温顔』と『愛語』を配ってきて下さった事と存じます。

あの「地藏菩薩」(教区長様談)のような笑顔と共に、ユーモアと機知に富んだ労りの言葉を頂戴し、心がとても優しくなり、ほっこり 笑顔になられた方々は多いことと存じます。

祖芳老師、これからも私達をお見守り下さいませよう…。

合掌



報恩謝徳 七十七年
梅花一輪 伝芳香乎

(恩徳寺に生まれ、育てられ、生かされてきた私)
皆様のご恩に報い、徳に感謝して参ったつもりの七十七年でした。
梅花を学ばせていただいた一人として、その芳しい香り(すばらしいみ教え)をお伝えすることはできたでしょうか。



本堂須弥壇上の遺影



卒哭忌 [百力日] 法要(導師・柴田弘一老師)



祖芳老師の思い出

鹿角市・恩徳寺梅花講員

工藤 トシエ

令和二年七月十八日、突然の訃報に驚き言葉も出ませんでした。ご入院されている事は存じておりましたが、お見舞いに行く事も叶いませんでした。が、和尚さんは必ずあの笑顔で元気に退院なさると信じていました。

幼少の頃から祖芳和尚さんはいつも穏やかに笑顔の絶えない方でした。お寺参りに行き、時おり梅花の練習日に遭遇し、御詠歌に心癒されていたある日、和尚さんから誘いがありお仲間に入れていただきました。お寺の諸行事にも参加させていただき、旅行やきりたんぼ会など、たくさん楽しい思い出は終生忘れる事はありません。法要での読経も心に染み、自然に頭が下がりました。もうあの笑顔と美しい声に接することができないと思うと本当に寂しいです。お世話になりました。

昨日の人は今日はなく、

会えば別るる世のならい

心より御冥福をお祈り申し上げます。



遺弟・遺族による謝辞



11教区梅花講員さんによる献詠



祖芳先生を偲んで

鹿角市・仁叟寺梅花講員

小林 庸子

岩館祖芳老師から梅花を教わっていた私達は、「祖芳先生」とお呼びしておりましたので、文章の中でもそうさせていたできます。

ある梅花の勉強会の日、祖芳先生から「どういう理由で梅花を勉強する気になったのかな」と聞かれたことがありました。理由と言われても特に浮かびませんでした。母から聞かされていたことを話しました。それは「昔、祖母はお寺の念仏講に参加していた。そういう関係で母も今という梅花をやり始めた」ということでした。母からは「あなたは年上の人を敬う心が足りない。年上の人のお話を聞く心がない。お寺の梅花に参加して勉強してみたら」と言われて始めました、とお話したと思います。祖芳先生はそれを、あの地藏菩薩様のような笑顔で静かに聞いてくださっています。

祖芳先生と一緒に勉強会は、あの笑顔とあたたかな雰囲気勉強が進んでいくので、緊張することなくいつも楽しく学習できました。それが自分のもので吸収でき、長年続けてこられたのだと思っております。



壇上にてお唱えする祖芳老師 (県北大会にて)



真夏、お盆前の11教区講習会にて

梅花のふるさと

詠讚歌の生まれた風景

へその二十六 良寛さま

心優しい清貧の人・良寛(二)

良寛さま

朝な夕なに眺め入る

波間に浮かぶ佐渡が島

良寛さまは恋しいの

佐渡は死なれた母の里

しあわせだろうかお母さん

水茎のあと涙にかすみけり

在りし昔のことをおもえば

作詞 赤松月船

◇ 生家・橘屋 ◇

良寛は、宝暦八年（一七五八）に越後出雲崎に生まれました。幼名は栄蔵、生家は古くから名主をつとめた山本家でした。同家は屋号を橘屋と言います。出雲崎の石井神社の神職も兼務する名家でした。栄蔵の祖父・新左衛門は、子が早くに亡くなり、佐渡の相川町の親戚山本家からひで（一説のぶ）

を迎え養女とし、その後、与板町の庄屋・新木家から泰雄を婿として迎えました。泰雄とひでの間に栄蔵を初めとして七人の弟妹が生まれました。泰雄は文学好きの性質で、以南という俳号を持つ俳人としても知られました。

父に似て栄蔵は学問好きでした。当時近郷に江戸で修学してきた儒者・大森子陽が開いた学習塾に学び、漢学の素養を深めました。そして十八歳で名主見習いとなります。

以南は風流人でしたが、郷村をまとめていく治政者にはあまり向いていませんでした。近郷の名主・京屋との競争に負け、もともと橘屋にあった代官所は京屋に移り、地元の農民・漁民からも信用をなくしていたようです。良寛研究者の一人相馬御風は次のように述べています。

以南といふ人物はかうした傾きかけた家運を挽回すべく最不適当、どちらかといへば超世間的な詩人肌の人であった。

そして栄蔵は出家します。橘屋の菩提寺は真言宗でしたが、栄蔵が身を寄せたのは隣村・尼瀬の曹洞宗光照寺住職・玄乗破了のもとでした。出家の動機について確かなことは何もわかっていませ

ん。良寛の逸話を編集した『良寛禅師奇話』には、仏に入るその初めは、いかなる故をも知らずと記しています。栄蔵の出家は橘屋にとって大変な驚きでした。兄弟の長子であり、父の跡目として名主見習いになったばかりだったのです。

栄蔵が寺に入ってから五年後に、光照寺を会場とした大授戒会が開催されました。戒弟は二百二十八人。戒師は破了の師であった備中玉島・円通寺の大忍国仙でした。栄蔵はその会中において国仙から「良寛」の名を授けられ、国仙が円通寺に帰るのに随い越後を去ることになります。その年の四年後、橘屋に重なる不幸が訪れます。妻ひでが逝去するので、良寛はその頃国仙のもとで修行中でした。三年後、以南は良寛の弟、二十四歳の由之に家督を譲り隠居します。この後、以南は越後



良寛堂（良寛生家跡）の良寛像
その視線のかなたには日本海に浮かぶ佐渡島が見える

を離れ、その行方定かにわからなくなり、寛政七年（一七九五）、良寛三十八歳の七月、京都の桂川に入水自殺します。由之が継いだ橘屋の家運はその後も衰退し、文化七年（一八一〇）にはついに当主・由之は家財没収、所払いの処分を受けることとなります。良寛五十三歳の年でした。

良寛こと栄蔵の生家は、このように悲運の渦中にありました。備中での厳しい禅修行、そして越後へ帰ってからの子どもたちと遊ぶ笑顔、そのときどきの良寛の胸底には父母・弟妹への思いが途切れることなく湧き出ていたことでしょう。

◇ 父母へのおもひ ◇

良寛が自身の出家のことをふり返った詩歌があります。

題知らず

旅行く時にたらちねの 母に別れを告げたれば
今はこの世の名残りとか 思ひましけむ涙ぐみ
手に手をとって我が面を つくづくと見し面影
は なお目の前にあるごとし 父にいとまを請
いければ 父が語らく世を捨てし 捨てがひな
しと世の人に 言わるなゆめと言ひしこと 今
も聞くごとと思ほえぬ 母が心の睦まじき その
睦まじきみ心を はふらすまじと思ひつぞ つ
ね哀れみの心持し うき世の人に向かひつれ
父が言葉のいつくしき このいつくしきみ言葉
を 思ひ出でてはつかの間も 法の教へをくた
さじと 朝な夕なに戒めつ これの二つを父母

が 形見となさむ我が命 この世の中にあらむ
限りは

母の睦まじき心、父の厳しき心が、出家した良寛の心の支えだったのでしょうか。良寛の次の一首は両親の思いと強く結びついているものです。

なにゆゑに家を出でしと折ふしは
心に恥じよ墨染めの袖

父の死後、良寛は両親のいない越後に帰ります。次の二首は母を慕う歌です。

沖つ風 いたくな吹きそ 雲の浦は
わがたらちねの 奥津城どころ
たらちねの 母が形見と朝夕に
佐渡の島べを うち見つるかも

雲浦とは出雲崎の浦辺、奥津城とは墓所のことです。

俳人としての以南は北越蕉風しやうふう中興の祖、すなわち芭蕉の俳風を継承する第一人者と言われ、その実力は高く評価されていました。次の一句、

朝霧に 一段低し 合歡あいかんの花

この俳句短冊には、父の文字の脇に良寛が細かな字で次のように書きつけています。

みづくきのあとも涙にかすみけり
ありし昔のことを思ひば

みづくき（水荃）とは、筆また墨跡のこと。父の筆あとをみると生前のさまざまなが思い出されて涙がにじむということでしょう。僧として俗縁を断つべき身でありながら、決して断つことのできない血縁への思い、それが出家後の良寛の心の綾となつていようです。

(つづく)

【以南俳句短冊】
上部左脇に細字で書きつけているのが良寛の筆



朝霧尔一段飛具し合歡乃花 以南書
美都久幾乃安登裳難み多尔可数気利安理し無可之能て東遠おも悲ハ 良寛拜書

梅花と共に



昨年七月、北秋田市・新田寺の保坂春聡師範から編集部宛でお便りと一冊の本が届きました。『でこぼこ道』と題された本の著者は御所野恵美子さん。北秋田市・龍淵寺の梅花講員さんです。米寿を記念して、娘さんたちが、母が魁新聞や地元の記事誌に載せた一文をまとめたものです。ページをめくると、そこには梅花と共にある日々で感じたあれこれ、素直な文章で丁寧に綴られていました。購入できるものではありませんが、機会がありましたら読者の皆さんもぜひ一読を。きっと梅花の魅力を再確認できることと思います。趣味のキルト作品も見事です！

今回、『同行』にもご本人から特別にご寄稿いただきました。



著書『でこぼこ道』

美しい梅花に



北秋田市・龍淵寺梅花講員

御所野 恵美子



朝から晩までテレビではコロナの話ばかりが続きます。御詠歌の練習もままならず、亡くなった友の見送りができず、淋しいこの頃です。

平成五年、夫の洋三さんを送つてくださった梅花講員さんの御詠歌に涙が止まらず、すぐにお仲間に入れていただきました。四国八十八カ所霊場めぐり、西国三十三所巡礼の旅をした時は、位牌を忍ばせたりリュックサックを背に、心の闇をぐぐり抜けた感じがしました（リュックの中には嫌ですと。アヤ・イロ・ツヤの勉強、先生の口元・声の出し方を真似することができずに、ただただ一生懸命繰り返しの練習のみでした。

永平寺、總持寺の一泊研修にも十年お世話になりました。詠題のお唱えにはいつも胸がどきどきして、違つた世界を感じました。ただただ一生懸命だったように思います。



御所野さんらが手掛けたキルト作品の展示会の様子

検定と一緒にあったお仲間とも肩を抱き合い、「良くできたよね」と自己満足したこともありました。顔も名前も知らない人達が、梅花を通して気持ちが一緒になりました。明るい笑顔で「またね」と…。



御所野さん作のパッチワーク曼荼羅

確か大船渡から来られた方でしたが、全国大会でも「秋田」を探して会いに来てくれました。あの人達は元氣かな。時々思い出します。梅花を覚えてくれたおばあちゃん達も、今となっては向こうの見知らぬ世界へ。涙を流しての御詠歌で送つた人達も遠くにいつてしまいました。

お葬式の最後にお唱えする無常御詠歌「月影」です。

世の中は何にたとえん水鳥の

嘴振る露に宿る月影

講習会での勉強も楽しく、厳しく、優しくと一生懸命でした。県外からいらしてくださる先生に講員さん達の緊張は隠せません。詠題から詠頭へ移る所が一番の難題でした。

十五日と二十五日は、午後一時半から龍淵寺様での梅花練習日です。いつも優しい奥山芳寿先生。梅花の道を一から教えていただきました。まだまだ学ぶことがあります。一生勉強と思っております。

男鹿三十三番札所御詠歌集のご紹介

和歌山県にある青岸渡寺から始まる「西国三十三所」は、観音さまの慈悲に出会う日本最古の巡礼の道として広く知られている。県内にも、秋田六郡三十三所や久保田三十三所など沢山の観音霊場が存在する。そして、巡礼と共に詠まれるのが三十一文字の和歌である御詠歌だ。詠み人も現在では定かでない歌の数々は、知識と教養とセンスが凝縮され、時を越えて多くの人々の心を打つものである。

取り易い仕上がりになっている。発行日が平成二十九年と最近のことと個人的に興味を湧き、今年三月下旬、巻末に記載された



瀧川寺住職・市橋三応老師

ある時、男鹿市船川の祥雲寺住職・奥山祖道師から「梅花をされているなら、男鹿にはこんな御詠歌集がありますよ」と手渡された冊子がある。それが今回ご紹介させていただく『男鹿三十三番札所御詠歌集』というものだ。A5版・カラー刷・四十二ページに巡礼マップと御詠歌、寺院紹介、伽藍写真がコンパクトにまとめられており、非常に見易く手に

編集委員の市橋三応老師（男鹿市男鹿中・瀧川寺住職）を取材で訪ねた。



瀧川寺御詠歌



「紫雲」替節の梅花譜

まず、御詠歌集作成の経緯を伺う。ある時、市橋老師が加茂青砂の雲洞庵に所用で訪れた際、お地藏様の傍らで札所の小冊子（原本・現在所在不明）を発見する。「これは広く人々に伝えるべきだ」と考えた市橋老師は、小冊子を基に歌集の製作に着手。近隣の若い僧侶の方々にも協力を依頼し、四く五年の歳月をかけて完成させた。巡礼マップには番号をふって周りやすくし、「おらほのお寺は何番かな、という気軽な気持ちで興味を持ってもらいたい」と市橋老師は話す。

御詠歌誕生の経緯もまた独特である。昭和九（一九三四）年、歌に造詣の深い男鹿市脇本の岩谷官蔵氏が中心になって、歌人としてもよく知られていた大館市玉林寺住職・桑名健龍老師（一八六七〜一九

四七）を招き、歌を詠んでもらったという。他の地域の御詠歌は西国のものをあてがったものも多



男鹿半島に点在する三十三番札所

く、それに対して、男鹿の御詠歌は桑名老師がその場所を実際に訪れ見て感じた情景を詠んだ、ここにしかないものである。だからこそ、歌が詠まれてから八十七年を経た現在訪れても共感が生まれるのだろう。

しかし、残念なことに歌が詠まれて僅か五年後には世の中は戦争に向かっている。市橋老師は「平和な世だからこそ歌も味わうことができる。戦中戦後の混乱の中で、徐々に人々の心の中から歌の存在が忘れ去られてしまったのではないかと想像する。

御詠歌集の編纂には、三月にご遷化された潟上市天王の自性院住職・鈴木道雄老師の尽力も大きかったと市橋老師は感謝の言葉を述べる。一番札所となっている自性院を始め、収録の御詠歌は「紫雲」の替節でお唱えすることができる。

男鹿半島に点在する札所は一日で周るのは中々困難だ。取材の最後に、市橋老師は「ゆっくり時間をかけて、八十七年前に詠まれた当時と現在の男鹿の風景を観比べ、三十三首の歌をじっくり味わいながら訪れてほしい」と語った。興味を持たれた方は、このコロナ禍が落ち着いたら、ぜひ御詠歌集を片手に男鹿の地へ足を運ばれてみては如何だろうか。

◎御詠歌集の入手方法は、男鹿市の最寄りの札所御寺院さまにお問い合わせください。

（近藤俊彦）

梅花インフォメーション

● 村松良周師範、特派師範就任のお知らせ



山本郡八峰町・正傳寺住職・村松良周師範が、令和三年四月一日付で梅花流特派師範に就任されました。県内歴代十四人目の特派師範誕生となります。県内のみならず全国に活躍の場を駆け、今後益々のご活躍を期待しております。

● 令和三年度梅花流秋田県奉詠大会開催(予定)のお知らせ

・期 日：十一月十五日(月・友引) 時間未定
 ・会 場：『ほくしか鹿鳴ホール (大館市民文化会館)』
 ・参加費：二千円

● 令和三年度梅花流宗務所検定会実施(予定)のお知らせ

■ 東北地区
 ・期 日：九月十三日(月・友引) 午前九時集合
 ・会 場：大館市『北秋くらぶ』
 ■ 中央・県南地区
 ・期 日：十月十一日(月・友引) 午前九時集合
 ・会 場：秋田市『さとみ温泉』
 ◎ 検定曲は昨年と同様、検定料は二千円です。
 【お問い合わせ先】 曹洞宗秋田県宗務所
 電話 018-868-1687

● 同行バックナンバーデータ公開のお知らせ

この度、曹洞宗秋田県宗務所ホームページ内で、『同行』創刊号から最新号までのバックナンバー(過去号)が閲覧可能となりました。平成元年十一月の創刊から三十二年が経過し、紙媒体の劣化対策として昨年データ化作業を実施しました。県内先達の珠玉の文章や佐藤俊晃師範(北秋田市七日市・龍泉寺住職)執筆による約二十年に渡る連載、県内師範の若かりし頃のお姿まで、見所満載です。目次から容易に記事検索が可能です。どうぞ有意義にご活用ください。ましたら幸いです。

★ 宗務所ホームページ ★ soto-akita.com

テレホン梅花

☎ 〇一八(八七三) 七六七六

【毎週土曜日にテレープが更新されます】

前号までのテレホン梅花は、柴田弘一師範が録音されたお唱えを流しておりましたが、今号からは、県内特派師範及び宗務所講師のお唱えを新たに録音しお届け致します。動画配信、ネット公開が主流の現在、あえて「電話」で挑む師範の面々。皆様のアクセスならぬ「コール」をお待ちしております！

【令和三年(予定)】

- ◆ 六月 五日 菩 提 (太祖) 本間雅憲
- 十二日 太祖影向 (和讃) 本間雅憲
- 十九日 花 供 養 (和讃) 村松良周
- 二十六日 供 華 村松良周
- ◆ 七月 三日 慶 祝 (和讃) 伊藤道人
- 十日 報恩供養 (和讃) 伊藤道人
- 十七日 澄 心 亀谷隆道
- 二十四日 戦災精霊 (和讃) 亀谷隆道
- 三十一日 平和祈念 (和讃) 柳川一童

お詫びと訂正

第四十七号の二ページ目に誤りがございました。岩館祖芳老師追悼文の一段目、「報徳寺」となっていますが、正しくは「報恩寺」となります。寄稿頂いた奥山芳寿老師並びに関係者の皆様に対し、謹んでお詫び申し上げます。

- ◆ 八月 七日 孟 蘭 盆 (和讃) 柳川一童
- 十四日 迎 火 三浦賢翁
- 二十一日 新亡精霊 (和讃) 三浦賢翁
- 二十八日 永 光 (永平二) 鈴木泰賢
- ◆ 九月 四日 永 光 (總持二) 鈴木泰賢
- 十一日 香 華 近藤俊彦
- 十八日 法 灯 (高祖) 近藤俊彦
- 二十五日 法 灯 (太祖) 佐藤宗明
- ◆ 十月 二日 まごころに生きる 佐藤宗明
- 九日 伝 心 柴田弘一
- 十六日 溪 声 (永平一) 柴田弘一
- 二十三日 道心利行 (和讃) 柴田弘一
- 三十日 追 弔 (和讃) 浅田高明
- ◆ 十一月 六日 正 行 (和讃) 清水道広
- 十三日 道 環 本間雅憲
- 二十日 聖 号 村松良周
- 二十七日 修証義 (和讃) 伊藤道人
- ◆ 十二月 四日 開山忌 (和讃) 浅田高明
- 十一日 真清水 浅田高明
- 十八日 御授戒 (和讃) 清水道広
- 二十五日 菩 提 (高祖) 清水道広
- 〒〇一〇一〇一一 秋田市金足岩瀬字前山三 東泉寺 〇一八(八七三) 二六七五

里山でひっそりと
 こうべを垂れて咲く
 カタクリの花。
 満開の桜が咲き誇
 る頃には、静かに地
 上からその姿を消す。

